

キラリわたしの学校

～つながりのある学習で体力づくり～

美土里小学校では、体力の向上を目指して、学年間のつながりを考えた体育学習に取り組んでいます。どの学年も、授業の始めにその時間に行う運動に関係した動きを取り入れたサーキットトレーニングに取り組んでいます。自分のペースで自分が選んだコースを走る中で、児童には十分な運動量が確保され、体も温まり、笑顔と歓声があふれる活気ある学習のスタートになっています。1年生から6年生まで、共通した取り組みを行うことで、新たな伝統として根付きつつあります。

また昨年5月からは音楽に合わせて体幹を鍛える「美土里小ビシッシャキッ体操」を体育集会の前や朝の会・帰りの会などで取り組んでいます。全身の筋肉だけでなく呼吸や頭も使うこの体操は、体のバランス

美土里小学校

問い合わせ 学校教育課(☎508212)
美土里小学校(☎22545)



↑一人一人が自分の体力に合わせたサーキットトレーニングを行っています。

と姿勢を意識することができます。体操を行った後は、「シャキッと背筋が伸びた気がする」と児童一人一人が効果を実感しています。

また、中学校との学びのつながりを意識した小中一貫教育の取り組みとして、西中学校から体育の教員が週2回来校し、5・6年生の授業をサポートしています。中学校の教員に指導してもらうことで、高学年では、多少緊張をしながらも、中学校を意識するようになってきました。

子どもたちの笑顔とやる気あふれる美土里小学校では、体育でのつながりを考えた学習内容や場の設定などの工夫を他の教科にも広げ、学力向上を目指しています。



Name
伊藤 幸誠くん 御供 未空さん 平塚 菜月さん 小口 春音くん

本との出会い

図書館司書がセレクトした新刊情報

開館時間 午前9時～午後8時(土・日曜日、祝日は午後5時まで)
休館日 月曜日
問い合わせ 図書館☎21669

カゲロボ



著者▷木皿 泉
いつも誰かに見られている。最初は単なる都市伝説のはずだった。人生の危機に面した彼らの前に、ふいに現れた「それ」が語ったことは。ささやかな罪と赦しをめぐる物語。

絲的ココロエ



著者▷絲山 秋子
双極性障害I型発症から20年。長年この病気とどうつきあってきたか。服薬ゼロになった現在から見た心得をつづるエッセイ。加齢、発達障害、依存、ハラスメントなどにも触れる。

迷路の外には何がある？



著者▷スペンサー・ジョンソン
チーズが消えた迷路に残ることに決めた小人のヘム。そんなヘムに大きな変化が訪れるが受け入れることができなくて…。人生の変化に怖がらず適応するための迷路脱出法を伝授。

人権を考える

問い合わせ 生涯学習課(☎226888)



～女性の人権～

内閣府の世論調査(平成28年9月)によれば、社会全体を見た時に「男女平等」と感じる人は、21・1%という結果が出ています。「女性の活躍できる社会」を目指すとして、さまざまな取り組みがなされてきていますが、「世界経済フォーラム」の男女格差報告によれば、日本は調査対象144カ国中110位にまで下がってしまっています。

ハラスメントの横行

私たちの周囲を見ても、女性の人権をないがしろにするセクハラ・パワハラなどのさまざまなハラスメントが職場や家庭で横行しています。新聞紙上でもたびたび取り上げられています。何がハラスメントに当たるのかを理解できていないことが多く、相手の気持ちに寄り添えない言動が要因になっています。セクハラを例にしますと、対価型セクハラ(職務上の地位を利用して性的な関係を強要し、それを拒否した人に対し減給や降格などの不利益を

負わせる行為)と環境型セクハラ(性的な関係を強要しないものの、職場内での性的な言動により働く人たちの不快にさせ、職場環境を損なう行為)に大きく分けられます。相手が不快に感じることをしないことが大前提ですが、場を和ませるつもりで、肩を叩いたり、「○○ちゃん」と呼んだりして相手に嫌がられてしまうという例もあります。対策としては、職場全体でハラスメントについての考え方を共有したり、相手がどのような受け止めるかを考える研修の機会を作ったりして相手を思いやることができるようにしていくことが必要です。

DV(ドメスティックバイオレンス)

内閣府の調査の中に女性の31・3%が配偶者からの暴力を経験しているというショッキングなデータがありました。これは男女が対等なパートナーとして考えられていないことが根底にあります。昔からの「男尊女卑」の考え方が根強く残り、子どもの頃から

「男の子らしく、女の子らしく」と育てられることもあります。家庭内では、いまだに家庭のことは女性の役目とした固定的性別役割分担意識が強く、家事・育児を依存している場合が多く見られます。DVは家庭内の問題として表に出せず、我慢してしまう傾向があります。女性が自分らしく生きるためには、絶対にあつてはならないことです。しかも、子どもが成長したときに暴力で物事を解決しようとする傾向が出るなどの2次被害も心配されます。困ったことがあれば、専用の窓口にご相談したり、緊急の場合には警察に通報したり、逃げ込んだりすることが必要です。

女性の輝く社会に

女性の持っている良さを十分に発揮できるように、お互いの立場を尊重し合い、家庭でも職場でも協力し合っていくこととする意識を持つことが大切です。「区別」はあっても「差別」のない社会をつくっていきましょう。